自然主義とナショナリズム
Naturalism and Nationalism

鈴木敦巳・日夏　隆

第Ⅱ部―日本「自然主義」と戦後文学

第一章

『破戒』はたしかに我が文壇に於ける近来の新発現である。予は此の作に対して，小説檀が始めて更に新しい廻転期に達したことを感ずるの情に堪えぬ。欧羅巴に於ける近世自然派の問題的作品に伝った生命は，此作に依て始めて我が創作界に対等の発現を得たといってよい。十九世紀末式ヴェルトシュメルツの香ひも出てゐる。我が小説檀に一期を画するもの，若しくは　せんとしつつあった幾多の前駆者を総括して，最も鮮やかに新機運の旆旗を揚げたものとして，予は此の作に満腔の敬意を捧ぐるに躊躇しない，『破戒』はたしかに近来の大作である。

以上は，周知のように，『早稲田文学』明治三十九年五月の「『破戒』を評す」における島村抱月の批評文の冒頭の一節だが，この文章はじつによく『破戒』の時代的意義を捉えていると思う。日露の戦役は，明治三十七年二月六日，ロシアにたいする国交の断絶と，同九月のロシアへの宣戦の詔勅ではじまり，三十八年九月五日の日露平和条約の締結をもって終わったが，翌三十九年三月，『緑陰叢書』第一編として書きおろし自費出版された『破戒』は，名実ともに日露戦後の戦後文学の第一声というべきで，その位置は，野間宏の『暗い絵』（『黄蜂』昭21，4，8，10）にかなり近いかもしれない。

わたしは，かねてから，日露戦後の観念小説，深刻小説と，日露戦後の自然主義文学と，第一次大戦後のいわゆる戦後派文学との，戦後文学としての類似ないしは相違に関心を抱きつづけてきたが，とくに，昭和二十年代初頭の戦後文学の運動と，明治三十九年にはじまった自然主義文学運動とは，その歴史的性格においてかなりの類似点が見いだせると考える。簡単にいえば，批評活動が創作活動をリードしたことと，それがなによりも旧套打破の運動であったことで，とくに後者は，形式，内容ふたつながらの根本的改革であった点で注目されよう。

わたしが，さきに三つの戦後文学の共通性に注目したのは，日清，日露，第一次とそれぞれ戦争の性格，その決着のつけ方を異にしながらも，結局は観念小説であり深刻小説であったという点で意外に似通っていることである。ここでは，自然主義の戦後文学的性格の分析が目的なので，その点にしぼって考えてみるが，野間宏や椎名麟三が好んで用いた「暗い」「重い」などの表現

とそこに描かれた暗欝な自我内部の光景は，そのまま島崎藤村や田山花袋のものなのだ。

自然主義文学運動の車の両輪としての藤村，花袋と，第一次戦後派作家の中心的存在であった野間，椎名の二人にも，ある種の共通性が見いだせる。しかし，それはここでの本質的な問題でないから，まず，『破戒』と『暗い絵』について，ふれておくと，最初に指摘できるのは，文体の決定的な新しさということだろう。

荒正人は，野間宏の『暗い絵』について，「ぼくはこの作品に初めて接したときの新鮮な驚きをいまもなお忘れることができない。…プロレタリア小説でもなく，同伴者的傾向文学でもなく，もちろんハイカラ小説でもないこの意欲的な試みは，昭和二十一年，敗戦の翌年という混乱の季節にふさわしい風体を帯びていた。新しい器にもられた新しい酒なのであつた。晦渋といい，新鮮といい，評者によって見方も異なっていたにしても，思想を肉体の核心に据えようとするいわば主体的な生き方は共感を以て迎えられたもののようである」（『戦後の文学』）と回想している。「暗い絵」の魅力のみが，第一に，欧文派の語法を大胆に取り入れたその破格な文章にあったとおなじく，『破戒』も，「蓮華寺では下宿を兼ねた」という硯友社の旧套を脱した簡素な文体の新鮮さでまず注目されたので，げんに抱月も，「叙景に人事を想はせ，人事に運命を想はせる筆法も，いかにも胸にこたへて，新しい人でなくては此の筆は使はれぬ，…所々に散見する心理的描写は概して説明的ながら，従来コンヴェンショナリズムを破って，ずっと若い句法を用いたため，之れまた新代の読者には相応の感動を伝へたであらうと信ずる」と書き加えている。

第一次戦後派の文学を「内なる異国の文学」といったのは高橋和巳だが，それとまったくおなじ意味で，『破戒』にはじまる日本自然主義もそう呼べるだろう。『破戒』と『暗い絵』の類似はたんに文体の変革という面だけでなく，〈父と子〉の主題においても共通するものを持っているのである。『破戒』の瀬川丑松，「隠せ」と教えた旧時代の父と，「我は穢多なり」と大胆に叫んで差別と戦う道を選んだ猪子蓮太郎がいたように，『暗い絵』の深見進介にも，節約第一を説き思想問題に気をつけろといってよこす小官史の父親と，急進主義の革命運動に突き進もうとする永作英作たちがいるのである。そして注目すべきなのは，この時代をへだてた二人の主人公が，父親に反抗して父親と別の道を歩もうとしながらも，ラディカリズムへの道は避け，それぞれ身に則した第三の道を歩みはじめる点なのだ。おそらく，ここに，二つの戦後文学における自我と社会の二律反則の主題があるので，わたしは，この問題を中心に日本自然主義における戦後文学的性格について考えてみようと思う。

第二章

藤村の『破戒』とそれにつづく花袋の『蒲団』（『新小説』明40，9）が日露戦争と密接にかかわっていること，とくに自然主義文学運動のリーダーとしての花袋は，日露戦争のさいの従軍体験なしに考えられぬことについて一言しておこう。花袋は，明治三十七年三月二十三日，博文館派遣の私設第二軍従軍写真班主任として東京を出発，金州，南山，得利寺，蓋平，大石橋の戦闘

を観戦したが，八月中旬高熱を発し，森鴎外の世話で，海城兵站病院伝染室に入院，腸チフスの疑いがあるため，やむなく遼陽行きを断念した（彼の帰京は遼陽陥落後の九月十九日）。花袋の『第二軍従征日記』（博文館，明38刊）の八月二〇日の項をみると，「軍中で腸窒扶斯し，自分は死を覚悟しなければならぬ場合に達したのである」と書かれ，つづいて，「遼陽，遼陽，これはわが金州に居る頃から夢みつゝあったところである。それが，今になって，此始末で，其大戦を見ることが出来ぬとは！実に無念。けれど何らする事も出来ん」とつけ加えている。また，同二十五日の頃には，熱はとれぬが，流行性腸胃熱と決まって愁眉を開きながらも，遼陽攻撃出発の噂を耳にして，「ああ，自分は愈々遼陽の戦争に取り残されるのである，と思ふと，無念で無念で実に堪えられぬ。
…南山以来自分は何んなに遼陽々々と胸に画いて，楽んで居ったかと思ふと，居ても立っても居られぬやうな気がする」と千歳一遇の機会をのがしたことを悔やんでいる。

この従軍以来の夢であった遼陽攻略戦を見のがしたことの無念さが，そのまま『田舎教師』（左久良書房，明42刊）結末の，病床にあって遼陽占領の報をきく主人公林清三の内面に感情移入されていることは容易にわかることだが，以上の『日記』で注目されるのは，二十日の頃の末尾に，島崎藤村の手紙を受け取ったことが記され，「島崎君のには，君がかの露艦出没の際，津軽海峡を渡って函館に赴かれたことが書いてあった」とつけ加えていることである。これは『緑陰叢書』自費出版相談のため，藤村が，妻冬子の実家を訪ねたことを指しているが，ここには『破戒』執筆に専念しているという藤村にたいするひそやかなライバル意識といったものが感じられる。函館の泰慶治のもとから花袋に送った藤村のその手紙には，「実は君が出発せらるゝ頃，小生も亦た従軍の志ありて，わざゝその為に上京せし日は，君が写真班の一行に加はり都を出でられし翌日なりし，尤も小生は田舎生活の悲しさ，適当なる機会を見出すことも難く，止むなく従軍を断念し，例の著作生活に例の如き日を送り居候。今回はすこし長き作にとりかかり，来年の春，小諸を去る迄完結すべき見込にて，日々精励筆致居候と書いてある。

藤村は「『緑葉書』序」に，都の友人たちの観戦の企てをきき，自分もまた筆を携えて従軍したいと考えたが，その志は果たされず，そこで自分は「破戒」の稿を起こした，と書く。「人生は大なる戦場である。作者は則ちその従軍記者である」とつづけているのだが，ここに藤村のいわゆる「鬱勃とした精神」を見ていいように思う。藤村は，後年『破戒』執筆のころを回想して，［私は自分の内にも外にも新しく頭を持ち上げて来た鬱勃とした精神でこの作を貫くべく決心した］（『現代長編小説全集　第六巻』序）といっているが，これをたんに『夜明け前』の執筆にかかりはじめた昭和四年五月という時点での精神態度の反映とのみ思ってはならぬので，むしろ，明治三十七年の『破戒』執筆の時点で，「げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる」といい，「思へば，言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき」と書きつけた「『藤村詩集』自序」の有名な言葉と照応させて考えたほうがいい。

ところで，「鬱勃とした精神」という言葉にこめた藤村の情念，その意味内容であるが，実は藤村は『破戒』の作中でこのことにすでに触れていたのである。瀬川丑松の部落民であることがすでに知れて，同僚の勝野文平が丑松を挑発する場面であるが，そこにはこう書かれている。

> 「僕は君、是でも真面目なんだよ。まあ、聞き給へ――勝野君は今、猪子先生のことを野蛮だ下等だと言はれたが、実際御説の通りだ。こりや僕の方が勘違ひをして居た。左様だ、彼の先生も御説の通りに、獣皮いぢりでもして、神妙にして引込んで居れば好いのだ。それさへして黙つて居れば、彼様な病気なぞに羅りはしなかつたのだ。その身体のことも忘れてしまつて、一日も休まずに社会と戦つて居るなんて――何といふ狂人の態だらう。噫、開化した高尚な人は、予め金牌を胸に掛ける積りで、教育事業なぞに従事して居る。野蛮な、下等な人種の悲しさ、猪子先生なぞは其様な成功を夢にも見られない。はじめから野末の露と消える覚悟だ。死を決して人生の戦場に上つて居るのだ。その慨然とした心意気は――はゝゝゝゝ、悲しいぢやないか、勇しいぢやないか。」
> と丑松は上歯を顕して、大きく口を開けて、身を慄はせ乍ら欷咽くやうに笑つた。鬱勃とした精神は体軀の外部へ満ち溢れて、額は光り、頬の肉も震へ、憤怒と苦痛とで紅く成つた時は、其の粗野な沈鬱な容貌が平素よりも一層男性らしく見える。銀之助は不思議さうに友達の顔を眺めて、久し振で若く剛く活々とした丑松の内部の生命に触れるやうな心地がした。」
>
> （傍点著者）

以上の傍点の部分をみると，藤村が『破戒』を貫こうとした「鬱勃とした精神」が，いわゆる「眼醒めたものの悲しみ」と表裏一体をなしていることがよくわかる。ここでは，『破戒』の作品評価が目的ではないので，この稿のテーマにしぼって考えることにするが，傍点個所で注目されるのは，猪子蓮太郎について，金碑を胸にかざるような成功は夢にも見られない，はじめから野末の露と消える覚悟で，死を決して人生の戦場に上がっている，といっていることだ。その後で，「鬱勃とした精神」にうちふるえる丑松を目して，男性らしいといい，友人の銀之助が久しぶりで内部の生命に触れるような心地がしたとつけ加えているが，これらの個所の丑松の背後に，若

くして刀折れ矢つきて斃れた北村透谷がいるといっていい。そして，また，はじめから野末の露と消える覚悟で，死を賭して人生の戦場に上るという言葉に，満州の廣野にたたかう名もなき日本軍兵士の姿を想起していた，とつけ加えてもけっして過言ではないだろう，

「予め金碑を胸に掛ける積りで，教育事業などに従事して居る」ところの「開花した高尚な人」にたいして，「其様な成功を夢にも見られない，はじめから野末の露と消える覚悟」の「野蛮な下等な人種」たる猪子蓮太郎と主人公たちを対比させ，その社会的不合理にたいする抗議の姿勢に「鬱勃とした精神」をみるならば，それを日露戦争にたいする国民的感激と興奮に結びつけることは一種の論理矛盾というしかない。ほかならぬ日露戦争を惹起したものこそ，日本近代資本主義の膨張と発展で，それの急速な成長が約束されたのは，ふるい身分制を温存させたこと――つまり，下層庶民の犠牲においてはじめて可能だったといっていい。しかし，瀬川丑松の告白が，結局は既成秩序，身分制を認め，それに屈伏するというかたちでの――隠していたことにたいする謝罪ということ以上を出ず，根底からの社会批判にすすみえなかったのと同様に，藤村や花袋における戦争体験も，国家の個人とのあいだに抵触するものをほとんど認めていなかったといえる。

この国家目的と個人のエゴの追及を，おなじ同心円上に捉えて独自の個人主義的帝国主義（「日本主義」）を唱えたのが岩野泡鳴だが，彼は昭和三十九年六月『神秘的半獣主義』（左久間書房）を，刊行し，そのなかで恋愛と戦争とを，刹那の心熱の燃焼という点で等価のものとして捉えている。藤村や花袋の戦争観も，国家目的の全肯定ということで，極端にいえば泡鳴のような論理に収斂するだろうが，彼らは泡鳴ほど単純でなかったので，日露戦争そのもののもつ本質的な暗さというものに眼をおおうことができなかった。花袋の『田舎教師』には，主人公林清三の戦争観として，次のように書かれている。

> 日本が初めて欧州の強国を相手にした曠古の戦争、世界の歴史にも教へられるやうな戦争―　その花々しい国民の一員と生れて来て、其名誉ある戦争に加はることも出来ず、その万分の一を国に報いることも出来ず、其喜悦（よろこび）の情を人並に万歳の声に顕すことすらも出来ずに、かうした不運（ふしあわせ）な病の床に横つて、国民の歓呼の声を余所に聞いて居ると思った時、清三の眼には涙が溢れた。
> 屍となつて野に横はる苦痛、その身になつたら、名誉でも何でもないだらう。父母（ちちはは）が恋しいだらう。故郷（ふるさと）が恋しいだらう。しかしそれ等の人達も私よりは幸福だ―かうして希望もなしに病の床に横つて居るよりは…。
> かう思つて、清三は遥かに満州のさびしい平野に横つた

同胞を思つた。

ここには，たんに花袋の戦争観の凝縮があるだけでなく，当時の平均的日本人の日露戦争についての心情の吐露がみられる。

第三章

さきにもふれたように，日露戦争は，明治三十八年九月五日の日露平和条約の締結をもって終わるが，この条約を不満として，同日，日比谷公園の交番焼討事件が起こり，さらに戒厳令の発令，新聞雑誌の取締法発布となり，物情蒼然たるものがあったらしい。戒厳令施行後，都下の情勢は一時静穏に帰したが，「十万の生霊と二十億の国費とを費やして贏ち得たところのものの何であったのかといふことに，改めて思ひ至った国民の心の底には…恐らくは，戦争の結果について，或ひは戦争そのものについて，何らかの意味で，深い疑惑を覚えたことは想像に難しからぬ」（本間久雄『続明治文学史下巻』）ことだという。つづけて，本間久雄は，平和条約締結直後の『時代思潮』十月号の社説で，「戦後の諸問題」として，「国家主義と社会主義との相剋，個人主義と人道主義との相剋，武断主義と人文主義との相剋」という三つの問題を取り上げている点に注目しているが，わたしには，徳富蘆花の「勝利の悲哀」（『黒潮』明39.12）と夏目漱石の「戦後文学の趨勢」（『新小説』明38.1）という「談話」がもっとも暗示に富んでいた。

「日本は勝利，勝利に酔えぬ。而して其勝利も実は当の露西亜を平身低頭せしむる能はず，却て我は己に力の終に近づかんとし，彼はこれより力を出さんとするの気はひを感じては，其勝利なるものゝ安内果敢なく不確かにして，戦争の結果は心地よく割り切れず，所詮上帝の帳簿に心残らぬ清算の記入をなし得ざる其悶々が破裂せしのみ」と蘆花は書き，ロシアのモスクワに攻めいったナポレオンの心境に比して，「勝利の悲哀」をいった。漱石は「戦後文学の趨勢」を論じて，西洋模倣のものではない，日本人としての「自己」を標準とした作物の出現をのぞんでいるが，その点では，「破戒」以後の自然主義作品も，社会の因襲のなかで苦悩する暗鬱な自我の内面が描出されていた。とくに，日露戦争の従軍体験をさかいにして，現実主義者としての相貌をいちじるしくしたのが花袋で，彼は戦場で，戦場の悲惨，人間の生のみじめさ，はかなさを痛切に体験することで，それまでの感傷的な浪漫主義者としての側面を清算してリアリストとして転生したといえる。その記念碑的作品「少女病」（『太陽』明40.5）だが，彼はここで少女病患者の主人公の小説家を葬ることで過去の自分に決別したといえるのである。花袋がハウプトマンの「寂しき人々」の影響下に書いた日露戦争前後の二つの小説――『女教師』（『文芸倶楽部』明36.6）と『蒲団』（『新小説』明40.9）を読み比べてみれば，花袋における現実深化はいやでもわかるが，そのあいだに岡田美知代（『蒲団』ヒロインのモデル）出現の影響のあきらかに感じられる「名張少女」（『文芸倶楽部』明，38，6）などもあって，花袋の戦争体験による現実深化と，彼が従軍する直前に女弟子として引き取った岡田美知代との交渉の経過の微妙にない合わさっているこ

とがよくわかる。しかし，この点については和田勤吾の詳細な研究（至文堂版『自然主義文学』）にまつとして，花袋にとっての戦後最大の問題は，<家>の問題であったといっていいだろう。そして，自己と自己の血肉のものを俎上にのぼらせて「皮剥の苦痛」にも似た果敢な現実暴露をあえてなさしめたものこそ戦場での悲惨を直視することでえたリアリズム精神なのであり，花袋の『蒲団』が藤村の『破戒』にました名声をえたのも，花袋の戦争体験が藤村のそれをうわまっていたことに由来するのかもしれない。

今次大戦後の戦後文学は，極限状況のなかの人間の実存の問題を凝視することがそのテーマであったが，日露戦争の戦後文学としての自然主義においては，<家>という拘束のなかに置かれた個人の運命を追及するのがそのテーマだった。第一次戦後派文学を積極的にバックアップした荒正人は，「第二の青春（『近代文学』昭，21，2）で，エゴイズムを通してヒュウマニズムへと説き，そこに明瞭な戦争体験の痕跡を示したが，これは考えようでは三十代文学者の積み上げでもあった。藤村や花袋や独歩，秋声，泡鳴なども，いずれも当時三十代の作家であり，そして彼らのあいだでもっとも関心と興味を持たれた問題が，「中年の恋」つまり「第二の青春」であったことを思うとき，このそれぞれ性格を豊かにした二つの戦後と戦後文学に，歴史の暗合を感じるのはわたしひとりではないだろう。

（了）

注は原則として本文内に記しました。